馬耳東風

年末になると各地でベートーベンの「第九」の演奏会が催される．その第九が日本で初演されてから今年でちょうど100年になるそうである．初演地は徳島，わが郷土である．徳島県を東西に流れる四国三郎吉野川の北側，板野郡板東町の一角（現：鳴門市大麻町）に第一次世界大戦時，中国青島で日本軍の捕虜（当時は俘虜と呼称）となったドイツ兵4,600名余のうち，約1,000名が収容されていた板東俘虜収容所があった．この地には四国八十八カ所霊場の第一番札所霊山寺があり，巡礼者に対して飲食物や宿を提供してやさしく迎える「お接待」の伝統が町民に浸透している．そのような地に俘虜収容所が建設されたのはドイツ人俘虜にとって幸いであった．

俘虜のうち膠州沿岸砲兵隊（MAK）軍楽隊長ハンゼン率いるMAK楽団，別名徳島オーケストラが，その第2回シンフォニーコンサートにおいて「第九交響曲」を合唱付きで第四楽章まで演奏したのである．1918年6月1日のことであった．1人の俘虜の言葉が残されている．「私たちは知っていました．この望郷のシンフォニーのプロデューサーは，松江所長だということを」．俘虜達が日本に送られる際には持ち物制限はなく，軍楽隊のメンバーは各自の楽器を持参していたが，その活動を許したのは松江豊寿俘虜収容所長その人であった．彼は板東収容所の前身である徳島収容所内でも演奏会を開かせ市民達にもその音楽を聴かせていたのである．

松江豊寿所長は会津藩士松江久平の長男である．久平は戊辰戦争敗戦後，斗南藩まで落ち延び，辛酸をきわめた生活を送ったという．父親から当時の話とともに，戊辰戦争終結後の明治2年春まで会津側戦死者の遺体収容を許さなかった非情な薩長軍に対し，「少しでも武士の情けがあれば」という言葉を聞かされて育った．俘虜達のことを「かれらも祖国のために戦ったのだから」というのが松江所長の口癖で，軍上層部と衝突しながらも俘虜の福祉向上に努力したのは，彼のこういう生い立ちと無縁ではあるまい．第二次世界大戦でも旧ソ連の捕虜となり，旧ソ連の収容所生活を余儀なくされたある俘虜は，2つの収容所を比較し次のように言っている．「板東には国境を越えた人間同士の真の友愛の灯がともっていました．私は確信を持って言えます．世界のどこに板東のような収容所が存在したでしょうか．世界のどこに松江のような収容所長がいたでしょうか」

板東俘虜収容所では，スペイン風邪等で11名の死者が出た．彼等の記念碑（墓）の建立の願いを松江は許可し，1919年8月31日，エンゲル楽団が「ローエングリーン」を演奏する中で除幕式が開催された．この墓に関しては後日談がある．第二次世界大戦後，シベリア抑留から帰国した付近の住民の妻がこの墓に花を飾り，清掃をする等の活動を始めたのが契機となり，板東町民と帰国したドイツ人俘虜やその家族との交流が始まったのである．そしてその後，収容所跡地に建設された「鳴門ドイツ館」敷地内に，今年6月，松江豊寿の胸像が建立され，その除幕式の様子がテレビで放映された．ドイツから参加した元俘虜の孫の女性は，祖父から板東の松江所長の話を繰り返し聞かされ，「彼がいなければ私はこの世に存在しなかった，松江所長は私の英雄です」と涙ながらに流暢な日本語で語った．彼女は祖父の話を聴くうちに日本語を勉強しようと思い立ったそうである．野に遺賢アリ，松江豊寿はまさに世界に誇るべき日本人であろう．（久）

参考図書：
中村彰彦：二つの山河，文春文庫（1997）
林　啓介：板東俘虜収容所，南海ブックス（1978）
棟田　博：板東俘虜収容所物語，光人社NF文庫（2006）
横田　新：松江豊寿，歴史春秋社（1993）